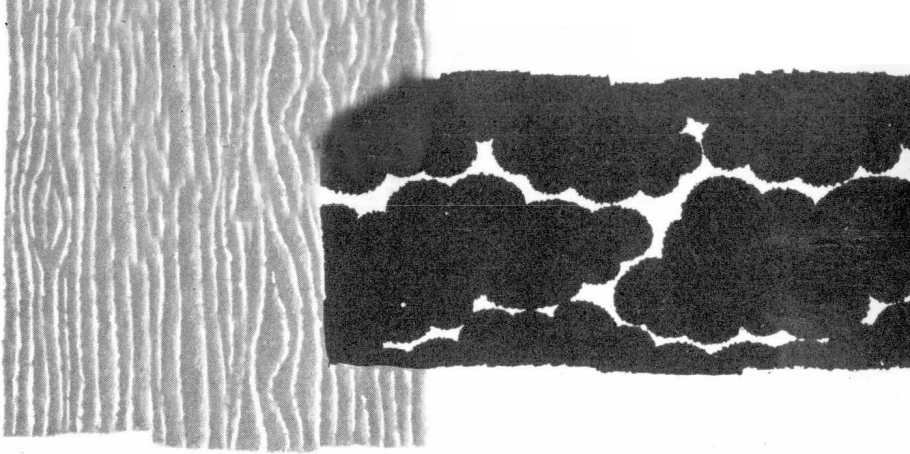


少年 日本名作物語全集

曾我物語





曾我物語

宮脇紀雄

歩日本名作物語全集



913 (N. D. C.)

不詳

そがもの がたり
曾我物語

宮脇紀雄訳

講談社 昭和33

少年
少女 日本名作物語全集 (9)

250P 20cm

定価 200 円

訳者 紹介

明治40年2月岡山県に生る。

農業をいとなんでいたが、後上京して
文学に専念し、坪田譲治、土師清二氏
の門に学ぶ。代表作に「こども百姓記」
がある。

昭和三十三年三月二十日発行 ©

原作者 不詳

訳者 宮脇紀雄

発行者 野間省一

印刷所 星野精版印刷株式会社

発行所

東京都文京区音羽町三ノ一九

株式
会社 大日本雄弁会講談社

電話大塚(94)三二〇一

振替東京 三九三〇

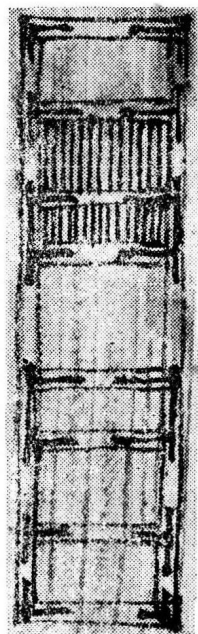
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

(毛利製本)

Printed in Japan



は
じ
め
に



曾我兄弟の物語は、映画、芝居、書籍などで、そのあらましのお話はおおくのかたがごぞんじだと思
います。けれども、くわしくこの物語を知れば知るほど、しいたげられた不幸な、かなしくせつない兄
弟の身の上に、熱い同情のなみだをこぼさない人はないであります。そして、勇ましくはなばなし
い、わかくてちったその一生に、ふしぎな勇気を与えられないではないであります。

三つと、五つの幼い日に、父を討たれた兄弟が、十八年というながい年月、血の出るような苦心を重
ねて、ついにその仇を討って死んだというけなげな事實は、鎌倉時代の当ても、たいそう人の心を動
かしました。武士の子として、あっぱれはすかしくない一生をおわたったかゞにちがいありません。

今の世では、こうした仇討などということはゆるされませんけれども、十郎、五郎の兄弟が持った正
義、勇氣、それらはいつの世にも人間が生きていくのにたいせつな柱であるといえましょう。八百年も
前のむかしのこのでき事が、今なおおくの書籍や、映画や芝居になって、人々にしたしまれ、熱いな
みだをさそっているということは、ふかく人の心にしみるものがあるからにちがいありません。

父を失った兄弟は、さすらいの子にひとしい日かげの身となり、仇の工藤は時の將軍、頼朝につかえて、飛ぶ鳥もおとすばかりのいきおいです。母の満江の、苦しい心のうちも、察するにあまりあります。一度は早く大きくなって、仇を討ってくれとはいいましたが、そのためにふたりの子が、命を失うようなことがあつては、いよいよたえられない悲しみでしょう。兄弟の子をつれて、曾我の家へふたたびかたずいたのも、のこされた子たちを無事に育てたい一心であつたと思われまゝです。鎌倉の將軍頼朝の、富士のすそ野の大まき狩という、日本一の晴れの場所に、命をすてて討つて入った兄弟。しとど五月雨のふる夜に、たいまつ火をかざして、この世の思い出に、も一度顔を見せよ、弟よ、兄よと、よびあう心の内はいかばかりだつたかと思われまゝです。本書では、少年少女のみなさんに読んでいただくために、原本（流布本・曾我物語）にあるおおくの横道の話ははぶいてわかりよくしました。どうかゆっくりと、心ゆくばかりこの美くしいなみだの物語を読んでください。

一九五八年三月

宮脇紀雄



會我物語

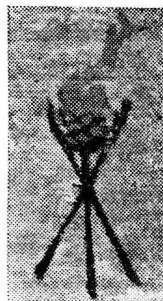
△目

次



母子

東国武士が集まつて.....	一〇
すもうのさわぎ.....	一六
かなしいさいご.....	二三
母と子は曾我へ.....	三九
平家へのいいわけ.....	四六
天下は源氏に.....	五二
かなしいあけくれ.....	五八
兄弟のめし出し.....	六四
由比ガ浜の波風.....	七〇
助命のよろこび.....	七六



兄弟きょうだいわかれわかれに……………七四

もえるたましい

箱根はこねへきた祐経……………八一

夜よるの山をぬけて……………八七

鬼王おにおうと団三郎……………九四

母ははのいかり……………一〇〇

おくびょうものの小次郎……………一〇六

むねんな浅間あさまの狩……………一二

あわてものの与一よいち……………二八

虎御前とらごぜんにわかれにきて……………三四

大力だいきの草ずりびき……………三三

はれ着ぎの小そで……………三九

よろこびのさかもり……………四四

いざ富士ふじのすそ野へ……………五〇

すそ野の花



友切丸と微塵丸……………	一五
あばれいのしし……………	一六
歌の知らせを……………	一七
かたみのおうぎと横ふえ……………	一七
一の木戸、二の木戸……………	一八
むねん、もぬけのから……………	一九
みごとに本望はたす……………	一九
十郎祐成のさいご……………	二〇
時致めしとられる……………	二二
りっぱな申しひらきを……………	二九
かたみの品になく……………	三六
松ガ崎の浜にちる……………	三三
曾我物語解説……………	三八
読書指導……………	四八





曾我十郎祐成



曾我五郎時致



曾我十郎祐成
河津三郎祐泰の子で、五つのと
き父の祐泰は工藤祐経のため討た
れ、弟の五郎とともに母につれ
られ、曾我祐信の家にいつて育て
られる。勇気はあるが、おとなし
く考えふかい。ひそかに剣術を学
んで十八年の後、工藤を討って、
その場で討死にした。

曾我五郎時致
十郎の弟で同じく祐泰の子。
父を討たれたときは三つであつ
た。小さいときから、兄といっ
しよに苦勞をかさね、さびしい日
を送る。十一のとき、なき父をと
むらうため寺へやられるが、にげ
出して武士になる。大力で武術も
すぐれていた。

母の満江



母の満江
十郎、五郎の母で、夫を討たれ、
おさないふたりの子をかかえて悲
しんだが、ぶじに子たちを育てる
ために、曾我祐信に再婚する。
富士のすそ野へ、狩見物にいく
という兄弟に、小そでをやったが、
これが親子のながのわかれだっ
た。

工藤祐経



工藤祐経
領土のことからうらみに思つて
義理のいところにあたる河津祐泰
を、手下に命じてやみ討ちさせた。
その後、鎌倉の將軍頼朝の氣に
いって、すばらしいいきおいにな
る。けれど、ついに富士のすそ野
の大まき狩のとき、兄弟のために
自分の陣屋で討たれた。

畠山重忠



畠山重忠
頼朝の重臣で、考えぶかい武士。
十郎、五郎の兄弟が、まだ十一と九
つの小さいとき、工藤のさんげん
であやうく由比ガ浜で首をぎられ
ようとした。重忠はま心にこめて、
頼朝をいさめ、兄弟の命をすくっ
てくれる。花も実もあるなさけぶ
かい武士である。

装幀そうざん

沢田重隆さわた しげ たか

絵

石井健之いし い たけ ゆき

目次・カットもくじ

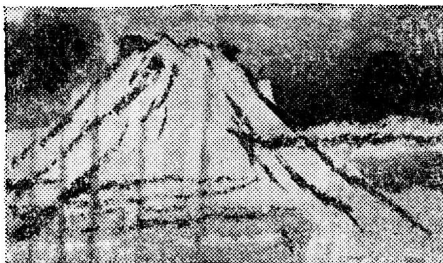
安野光雅あん の みつ まさ

解説かいせつ

市古貞次いちこ けいじ

読書指導どくしよしどう

増淵恒吉ます ぶち へいきち



曾そ我が物もの語がたり



作き者しゃ

不ふ

詳しょう

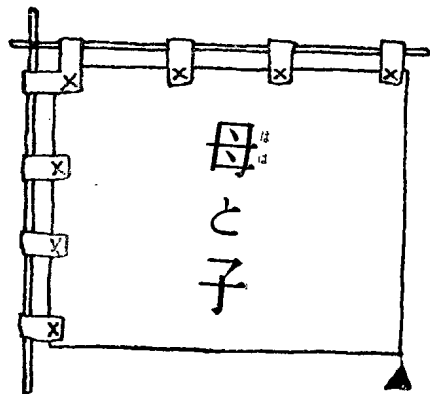
訳やく者しゃ

宮みや

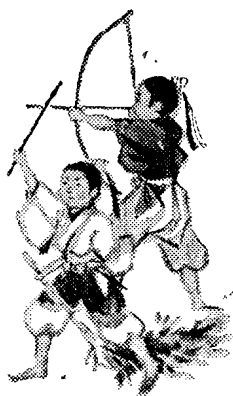
脇わき

紀とし

雄お



東国武士が集まって



平清盛のひきいる平家の一門が、まだ天下の権力をにぎって、いきおいをふるっているところのことでした。伊豆の国（静岡県）に、伊東祐親という大名がいました。大きな館をかまえ、たくさんの郎党（従者）をやしなっていて、強い勢力をもっていました。

このころ、源頼朝は、源氏の嫡男（長男で、あとつぎ）でありながら、「平家にあらずんば人にあらず。」

と、おごる平家の権勢にどうするすべもなく、かたいなかのさびしいかくれがに、ひそかに世をしのぶ身な
のでした。

「世が世なれば、あつぱれ源氏の大將として、はなばなしいお身のうえなのになあ。」

「おきのどくなありさまよ。」

「なんとか、おなぐさめできないものか。」

むかしから、源氏の恩を受けてきた人たちは、そういつて語りあいました。

「いくら平家の世だといっても、ここは京都から遠くはなれた東国、一夜頼朝公をおなぐさすめる宴（さかもり）をはったとて、それがどうということもあるまい。みんなで、おなぐさめしようではないか。」

だれいうともなく、そういう話（はなし）がまとまりました。そしてその場所は、べんりな伊東にある、伊東祐親の館（やうた）がいちばんだということになりました。

「これこそ、またとない身のめんぼく。」

と、祐親はよろこんで、さっそくしたくにとりかかります。安元元年（今からおよそ七百八十年前）秋もは

やなかばのことでした。

いよいよ当日になると、相模の住人、大庭平太景信をはじめ、三浦、鎌倉、岡崎、曾我などの、近国のおもだったさむらいたちが、思い思いの酒宴のおみやげをもって、祐親の館へと集まってきました。日ぐれをまわって頼朝も、むかえの駒（うま）にまたがり、こよいの主客としてかけつけました。

伊東祐親は、あらんかぎりの山海の珍味をおしみなく出して、頼朝をはじめ、人々をもてなすのでした。

にぎやかな酒宴は、夜のふけるのもわずれて、いつはてるともなくつつけられました。

みんな、親や祖父の代から、源氏の恩を受けてきた東国武士たちです。いまはしかたなく、とぶ鳥おとすいきおいの平家の風になびいていますが、いつか時きたらば、この頼朝公をおし立てて、一旗あげずばおかないと、口にこそ出しませんけれども、むねのうちにはたがい、その氣持が通じあっています。

まるでそのうつぶんばらしでもあるように、さむらいたちはみんな、がぶがぶとお酒をのみかわしました。海老名源八というさむらいがおりました。

「ああ、よった。ええ心持じゃ。これほどたいしたさかもりになると知ったら、国から勢子（鳥やけもの）をかりたてる人）をつれてきて、音に名高い、奥野へ狩にいくのじゃったにああ。」

と、源八は、お酒によったいきおいで、なにかじまんでもするようにいいました。このころのさむらいは、山で狩をもよおしては、そのえものでさかもりをしたものです。伊豆の奥野は、人に知られたすばらしい狩場なのでした。

「おお、よくぞ申された。」

源八のことばを聞いた主人役の祐親は、そういわずにはいられませんでした。

「わざわざかたがたが、この祐親のところへお集まりくだされたのじゃ。頼朝公へのおなぐさめはいうまでもなく、せつかく遠いところからお集まりくださったかたがたへのおもてなしに、あすは奥野へ、狩のご案内をいたしましょう。」

そういつて祐親は、さっそくわが子の河津三郎祐泰に、勢子を集め、狩のしたくをするようにと命じました。

祐泰は心のおだやかなさむらいで、鳥やけものをい殺すことはあまりこのみませんでした。が、おおぜいの人々の前で、父の祐親がはつきりといいだしたことです。思いとどまらせることもできません。

「こころえましてごさいます。」

とひきさがり、夜ふけにもかかわらず、八方に人をとばして、鳥やけものを追い出す勢子を集め、弓や矢を用意して、狩のしたくをととのえるのでした。

つぎの日、朝早くから、おおぜいのさむらいたちは、あるいはうまに乗り、あるいは徒歩で、思い思いに伊豆の奥野をさしてでかけました。近くの村々から、よび集められた勢子どもが、たけや木のぼうを持って、そろそろとあとにしたがいます。

この勢子の群れのなかに、思いがけない、ふたりの男がまぎれこんでいました。それは、京都にいる工藤祐経の郎党で、大見小藤太と、八幡三郎です。

ふたりは祐経のひみつの命をうけて、伊東祐親とその子祐泰を討つために、ひそかにその機会をねらっておりました。

「三郎、どうやら時がきたようじゃぞ。」

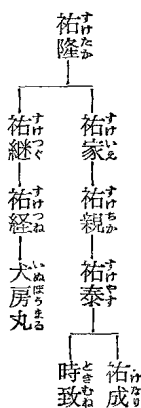
「うん、奥野の山へ狩とは、二度とないよいおりじゃぞ。ぬかるな、小藤太。」

「もとより、がってん！」

ふたりはたがいにしめしあわせて、身じたくととのえ、なにげないふりをして勢子の群れにまぎれこみました。

工藤祐経が、どうして祐親親子をねらうかといいますと、祐経の父は祐親の父とは腹ちがいの弟でした。が、祐親の父が早くなくなったので、祖父の領地をつぎました。祐親はそれがふまんでなりません。叔父とはいえ、父とは腹ちがいの子です。自分がやがてつぐべき領地を、祖父から叔父がついでしまったのです。ところが、この叔父も病気でなくなり、そのとき一子、金石はまだ九才で、領地をおさめることができません。そこで祐親がかわっておさめることになりました。つまりこれで、領地は長男の家にえったわけです。

けれど、金石は大きくなると元服して、工藤祐経と名のって京都にのぼり、平家の御曹司、平重盛につかえました。祐経はなんども奉行所に、祐親の領地を取りもどしてもらいたいとねがい出しましたが、それはいつも取りあげられませんでした。



祐経はそれでもあきらめることができなくて、京都をぬけ出し、伊豆にくだってみかたをかたらい、武力にかけても祐親、祐泰をはろぼそうとしましたが、勢力のある祐親の領地内にはいることもできないあります。ま、ほうほうのていで、京都へにげ帰りましたが、
(よし、このうえは、祐親親子をやみ討ちしてくれよう！)